

石井啓一郎

本格的なペルシア語現代散文の礎を築いた巨匠として知られる、二〇世紀イランの大家サーデグ・ダーヤト（一九〇三—五〇）。彼は今日なお、その前衛的な新鮮さと、それゆえの難解さによって代表作と高く評価される傑作『盲目の梟』（一九三六）に代表される、西欧の実存主義思潮やシュールレアリズムに深く傾倒して多くのサイコフィクション的な小説を遺した一方で、新興ブルジョワ層から下層階級まで、同時代のイランに生きた人々の現実を、グロテスクなまでの修辞や表現を駆使した独自の写実的小説も多く残した。そこには、多分に「ダーヤト自身の等身大の姿を投影するような、イランの因習的な伝統社会のなかに居所を見失った西欧的知識階層の苦悩も主題として扱われる。また宗教的権威の偽善や欺瞞。「民衆のイスラーム」の迷信や狂信。社会の底辺の過酷な環境に生きる人間のヒカレスクなまでの逞しき、それと裏腹な浅ましきと醜悪さ。といった、当時のイランの現実を批判的な視点から活写するようなりアリズムのな作品も多く残している。

「ダーヤトの作品は、その生涯の代表作『盲目の梟』のほかでは、『ハージ・アーガー』（一九四三）、『真珠の大砲』（没後刊行、一九七九）、『アラヴィーエ・ハーノム』（一九三三）以外に中長編小説に分類される作品の比重は少なく、最も創作力が旺盛であった一九三〇年代に書かれた短編小説、風刺詩やコント、民俗誌、評論やフランス語からの翻訳などに優れた作品が多く残っている。

ここに紹介する短編小説『禿鷹たち』は、そんな「ダーヤトが、イラン、ひいてはイスラーム世界に今もなお現存する「一夫多妻制度」を女性の視線から批判的に描こうとした面白い一篇である。無論「男性」である作者にとつて、文学的言説の客体にしかなり得ない「女性」を描くのであるから、ジェンダー論的な視点から見た女性の現実をドキュメンタリー乃至はルポルタージュとして、本篇から読み取ろうと試みることは難しい。しかし、一種の恐怖と嫌悪と憧れが入り混じった視線から、女性に関する独特な文学的言辭を展開した「ダーヤトの数々のフィクションのなかで、彼の抱く一種の「悪女」というイメージを知るうえにおいては、本篇もたいへんに興味深い作品であることは間違いない。

本篇は、一人の男が「死んだ」はずの状況の

なかにおいて、その第一夫人と第二夫人が財産権を含めて、各々極力有利な立場を勝ち得ようとばかりに、露骨に「生前」の夫への良妻ぶりをひけらかしては、相手を貶め、互いの権利を主張する。そんな利己的で、えげつない罵り合いのなか、夫の死自体に「自然死」と異なる、何等かの作為が介在していたのではないか？ より端的に言えば夫を「殺した」とまではいえずとも「未必の故意」で生きたまま墓へ葬ろうとしたのではないかという、空恐ろしい疑念すら浮上する。いわゆる小説的な「叙述」を抑えて、二人の妻の諍いを直接話法で会話劇風に展開する本篇は、一次的には夫人の各々の言い分を中心に据えているので、「夫への殺意」あるいは「謀殺行為の実行」までが本当にあったのか、真実は明かされない。ただ、結末はその「死んだはず」の夫が、実は仮死状態であり、すんでのところまで生理めにされる直前に息を吹き返して、死に装束を施された姿で墓地から家へ還ってくる。

この事態を前に、茫然自失となる妻たちの狼狽のうちに、物語は一種の悲喜劇として終わる。

いうまでもなく本篇のタイトルである「禿鷹」とは、古くイランのゾロアスター教において死者の遺骸を穢れなしに葬るために行わ

れた鳥葬の際、遺骸を食る鳥である。そして、このタイトルは、あさましい私欲をむき出しに「死んだ」夫を喰いつくそうとする妻たちと同時に、死者を葬る過程で小金をがめつく取ろうと絡んでくる聖職者の姿も活写され、死肉を食る秃鷹と、死んだ(はずの)男に群がる人間たちの精神性のグロテスクさを、重ね合わせているといえよう。

あくまでも、フィクションたる本篇から、女性の中からみた(さらには、女性の体験的事実、実感としての)イスラームの「一夫多妻」という制度的テーマに対する実録的な情報を読み取ることまでは、できないかもしれない。しかし、当時の欧州を知ることによって、ヘダーヤトの目に映った母国イランの社会の現実に根強く残る因習の不合理や醜悪さ、残酷さ。さらには欧州をひとつの「試金石」とした場合にみえてくる、祖国の社会的後進性や知的貧困を前にした、近代的知識人の苦悩。こうした背景のなかで、イランの歴史学者であり、またヘダーヤト研究の世界的第一人者と知られる、オックスフォード大学のホマーユーン・カートウズイアーン氏が「批判的リアリズム」と分類した創作ジャンルに属する、多くの作品をヘダーヤトは残している。本篇もまた、そのジャンルに分類されるひとつの傑作で

ある。

但し、ヘダーヤトにおける「近代性」に基づく批判というものは、いみじくもトロント大学のラーミン・ジャンバングルー氏が、一昨年同大主催のシンポジウムのパネリストとして発言された言葉、「ヘダーヤトにとっては『近代性』というのは、決して(観念的思想や抽象的価値観としての)『イデオロギー』ではなくて、彼が活きた体験(独語 *Erleben*)のなかに知った規準に過ぎない」ということは心に留めておくべきであるやに思われる。宗教、迷信や社会的因習などへ、イラン人としては自虐的なまでの批判をくりだすことも少なくなかったヘダーヤトではあるが、それは単純に「西欧」をひとつの価値観として絶対化した批判とは異なるものであるという意見は、意味深い指摘としてここに特記したい。彼はしばしば宗教的な価値や言説にさえ、破壊的なまでの批判や揶揄を繰り返しているのは事実であるが、それが西欧的近代を「政教分離を基本とする非宗教的近代(*Secular Modern*)」という図式を踏襲しただけの単純な批判であるとは言えない。斯かる視点は、ヘダーヤトを論じるうえで筆者も含め、看過してはならないものであると理解する。むしろ例えば、イマーム・ホセインの殉教譚や隠れイマーム再

臨待望のような、シーア派信仰に淵源を持つ集団的パトスを、歴史を通じて国民的に共有する「そんなイラン」もまた身の内であること痛いほど知りながら、なおそこに居所が見いだせない。そして等しく西欧にも居所がない。そこにヘダーヤトが煩悶した袋小路があったのではなからうか、ということとは、本篇のような作品を読むときに意識しておくべきなのであろう。

「西欧」をひとつの価値観として絶対化した批判とは異なるものであるという意見は、意味深い指摘としてここに特記したい。彼はしばしば宗教的な価値や言説にさえ、破壊的なまでの批判や揶揄を繰り返しているのは事実であるが、それが西欧的近代を「政教分離を基本とする非宗教的近代(*Secular Modern*)」という図式を踏襲しただけの単純な批判であるとは言えない。斯かる視点は、ヘダーヤトを論じるうえで筆者も含め、看過してはならないものであると理解する。むしろ例えば、イマーム・ホセインの殉教譚や隠れイマーム再